

2020年度 ソニー幼児教育支援プログラム
「科学する心を育てる」
～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～



自然や人との豊かなかかわりを通し、
主体的に遊ぶ子ども

～見たい！しりたい！つたえたい！ 心が動く瞬間を捉えて～



芦屋市立緑保育所

目 次

はじめに	1
「科学する心」の考え方と取り組みのテーマ	1
実践① 3歳児 自然に触れて感動する体験を通し、イメージを膨らませ、表現することを楽しむ ～自然を見たい！触りたい！話したい！身体いっぱい感じたい！～	
事例① ダンゴ虫み一つけた！（4月）	2
事例② カエルちゃん大好き！（6月）	3
事例③ カエルになって遊ぶケロ！（10月～12月）	5
事例④ さようならカエルちゃん（3月）	6
実践② 4歳児 夏野菜に親しみ、感覚を豊かにする ～やりたい！知りたい！仲良くなりたい！～	
事例① 野菜の赤ちゃんがやってきた！（5月初旬）	8
事例② カボチャのツルがプールに入りたがっている！（6月中旬）	9
事例③ 野菜クイズをしよう！（7月初旬）	10
事例④ カボチャからスイカのおいがした！（8月下旬）	12
実践③ 5歳児 7月～3月 プレゼン活動を通して伝えあう楽しさを感じる ～みんなに伝えたい！～	
事例① この絵本が好きな理由はね・・・（7月初旬）	13
事例② みんな、聞いて～！（7月下旬～）	15
おわりに	18

はじめに

緑保育所は、埋め立て地である芦屋浜地区に立地する保育所である。周辺は開発された住宅地で、その中を遊歩道が縦断し、住宅と公園や施設がつながっている。近隣には芝生広場や小高い丘、池やビオトープを持つ大小複数の公園がある。子ども達はそこを探検気分で散策したり、四季折々の様々な花や木の実にも触れたりすることができる。

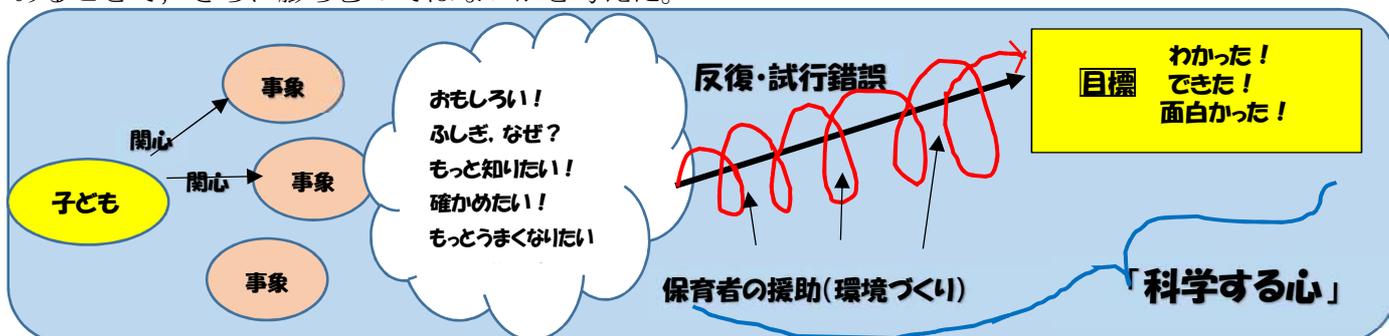
遊歩道から徒歩20分のところに芦屋浜がある。そこでは、カニ探しや川べりの散策を楽しめる。このような立地条件を活かし、保育者たちは、子ども達と散歩に出かける機会を多く作っている。

所内では小規模の畑、果樹園、池があり、畑では毎年季節ごとの野菜を栽培してその成長に触れ、収穫し、調理して味わう体験をしている。子ども達が自然と関わり、実際に見たり触れたりする体験の中で、豊かな感性を育む事を考えている。

「科学する心」の考え方と取り組みのテーマ

子ども達の生活や遊びの中には、同じことを繰り返しながら試して楽しむ場面や、遊びの中で試行錯誤をする場面がたくさんある。小さな虫に関心を寄せ、夢中になって集める。「どろだんご」を壊れても何度も何度も作る。友だちと協力して積み木で繰り返し大きな作品を作る。こういった毎年見られる子どもたちの姿の中にもそういった場面がいくつもある。そして、その反復と試行錯誤は、「成長したい」という思いの表れでもある。

子ども1人1人が「おもしろい!」「不思議!なぜ?」「もっと知りたい!」「確かめたい!」「もっとうまくなりたい!」と感じ、目標に向かって子どもなりのDo(実行(やってみよう)), Check(評価(うまうまかかったな・うまくできた)), Action(改善(うまく出来なかったのはこれが原因かな・今度はこうしたらいいかな))を繰り返す。このDCA(実行→評価→改善)の中に「科学する心」の育ちがあるのではないかと考えた。そして、その「科学する心」は子ども自身の中に生まれるが、そこに保育者の共感や援助があることで、さらに膨らむのではないかと考えた。



それでは、保育者が適切な共感や援助を行うために必要なことは、なんだろう。それは、保育者が「子どもを理解すること」であると考えられる。同じ活動をしていても生活経験や興味・関心は子ども1人1人異なる。だからこそ、子ども1人1人を丁寧にみて理解することが必要である。

以上をふまえて、今年度は「自然や人との豊かな関わりを通し、主体的に遊ぶ子ども～見たい、知りたい、伝えたい～心動く瞬間を捉えて」を研究テーマとした。特に以下の3点に注意して記録し、子どもの理解を深め、「科学する心」の育ちを援助していくこととした。

- ① 子どもが何に興味を持っているか、何を感じているか、その心情を丁寧に読み取る
- ② 子どもがさらに「もっとやってみよう!」と思えるような活動(遊び)のための環境づくりを保育者が構成できているか。
- ③ 活動(遊び)の中で子ども達の意識が変わっていく様子、どのような学び・育ちがあったかを捉える。

実践① 3歳児

自然に触れて感動する体験を通し、イメージを膨らませ、表現することを楽しむ

～自然を見たい！触りたい！話したい！身体いっぱい感じたい！～

事例① ダンゴ虫みーつけた！（4月）

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる姿
<p>・春の畑でのダンゴ虫探し（4月上旬） 「あついた！」「もぐって逃げられた」「どこ見せて」「石の下にかくれんぼしてるよ！」子どもたちは、ダンゴ虫を見つけるのが嬉しくてたまらない。 「丸まってる？動かないけど生きているかな？」 「どうして丸くなるの？」と、友だちと話しながらダンゴ虫探しを楽しんでいる。 何度も「触っては見る」ことを繰り返し、子ども達は、ダンゴ虫は触ると丸まることに気づく。 「おもしろいな～」</p> <p>・ダンゴ虫を見ているうちに自分も同じように動きたくなり、1人がダンゴ虫になって這い始める。 1人が始めるとクラス全体に広がり、這う、丸まるなど、思い思いの表現を楽しみ始めた。 そこで、這う、丸まるだけでなく、転がるという遊びもできないかと考え、近くの公園の土手に行った。 すると土手を見た子どもたちが、我先にと土手を転がり始めた。「おもしろいね。」 友だちと何度も転がり、何度も這いあがる遊びを存分に楽しんだ。</p> <p>・ダンゴ虫に心を寄せている子どもの姿を見て、友だちとのごっこ遊びに発展できないかと「ころちゃん」の絵本を読む。読み終わると自分たちの好きなダンゴ虫のお話だったので、「楽しかったね」「カマキリが怖かった」「びっくりした」など、友だちと思い思いの感想を言い合っていた。その後、絵本を見たこともあって、ダンゴ虫ごっこが始まる。 いつものように「歩く」「這う」「転がる」など、思い思いの表現を楽しんでいたところに、登場したのが「カマキリ」。 思わぬ登場に子ども達は驚き、一斉に丸くなり隠れていた。ピクリとも動かない子どもの姿が印象的だった。</p> <p>・ダンゴ虫を飼ってみる（4月中旬） 自分もダンゴ虫になって遊んだことで、さらに子</p>			<p>◎友だちがダンゴ虫を見つけると、それに刺激を受けて「自分も見つきたい！」と意欲がわいている。</p>  <p>◎ダンゴ虫との出会いにワクワクしている。 ◎丸まっているダンゴ虫が不思議でたまらない。</p> <p>●思い思いの表現を受け止める。</p> <p>周りの環境（地の利）を生かした遊びの場の設定</p> <p>◎友だちと共感しながら好きな遊びを何度も繰り返している。</p> <p>色々なダンゴ虫のお話絵本を用意する。</p> <p>◎ダンゴ虫と自分を重ね合わせている。 ◎ダンゴ虫になった楽しい遊びを思い出し、またしたいと思っている。</p> <p>●保育士がお話の世界に子どもたちを誘おうと、「カマキリ登場」を仕掛けた。 ◎お話に出てきた「コロちゃん」の気持ちを実感している。</p>	

子どもたちは、ダンゴ虫探しが楽しくなってきた。
 しかし、集めるだけ集めて毎日そのままにして帰っていた。その中で1人の子どもが
 「動かなくなってるよ」
 「かわいそう！お家に帰りたいみたい」「お母さんダンゴ虫が心配している」
 保育者が「どうしたらいいかな？」と声をかけると、「元気がなくなったらかわいそう」
 「やっぱりお母さんのところがいいよね」
 と、みんなで夕方には畑に帰してあげることに決まった。

色々な大きさの箱を用意して、飼育ケースの代わりに置いてみた。

箱を見つけた子ども達、さっそくダンゴ虫の家作りが始まった。家が出来ると大小様々なダンゴ虫を見つけて、「おかあさんと赤ちゃんを家族にしているの」
 友だちと協力して箱を区切り、草や葉っぱ、木の枝を入れ、「ここはごはんを食べるところ」
 「これは滑り台！公園だよ」「ここは寝るところ、お布団掛けてあげるね」と友達と会話をしながら家作り楽しんでいた。



近くの公園にも
 バッタや面白い
 ものがあるよ！

- 毎日、集めたダンゴ虫に気づけるような声をかける。
- ◎いつもと違うダンゴ虫の様子に気づく。
- ◎ダンゴ虫の気持ちを代弁している。
- 子どもの気づきをクラス全員に伝え、みんなで考える機会にした。
- ダンゴ虫をただ集めるのではなく、育てるという気持ちが持てるような工夫を考える。

子どもが選べるように、家作りの素材をたくさん用意する。

- ◎家作りを行ったことで、ダンゴ虫の習性に気づき土を湿らせたり、隠れる石や葉っぱを入れてあげている。自分たちの生活とも重ね合わせている。
- ◎ダンゴ虫に愛着がわき、怖がる子どもがいなくなった。

振り返り：子ども達がダンゴ虫に触れて言葉や身体で表現したこと、絵本等を通して知ったダンゴ虫の特徴や習性について、みんなで共通理解することを大切にした。経験やイメージを共有して楽しく遊ぶことが子ども同士を結び付け、簡単なルールのある遊びにも繋がった。

事例② カエルちゃん大好き！（6月）

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる姿
<p>・カエルとの出会い（6月上旬） 保育者が家にいたカエルを持ってくる。 初めてカエルを見た子どもたちは、 「くりくりした目、こっちをじっと見てるよ」 「かわいい！」と口々に感じたことを言っている。 カエルがジャンプを始めると。「とんだ！」「まって！まって！」と夢中でカエルを追いかけ始める。 そのうち、カエルの真似をしてジャンプを始めた。 「カエルのジャンプかっこいい！」 「私もこんなに高くとべるよ。」「見て！」とカエルジャンプをみんなで楽しんだ。 その後、子どもたちが「カエルのお世話をしたい」というので、じゃあみんなでお世話ができるように「名前を決めてあげよう」と話をする。 「どんな名前がいいかな」</p>				<p>◎初めて見たカエルに興味を示している。 ◎実際にカエルの跳ぶ様子を見たことがうれしくて、ついつい体が動いている。3歳らしい姿である。</p> <p>思いきり身体を動かして遊べる空間を確保する。</p> <p>◎友だちと一緒にするのが楽しい。</p> <p>●よりカエルに親しみがわくように、名前を付けようと子どもに提案する。</p>

「カエルってゲロゲロ泣くよね」
「ゲロちゃんはどう?」「それがいい!」
満場一致で名前がついた。
名前を付けたことで、さらに親しみがわき、名前でも呼びかけたり、お世話をしたり、可愛がる姿がみられた。

・ゲロちゃんが大変だ (6月中旬)

ある日、カエルが白くなっているのに子どもが気づく。「ゲロちゃんが大変! 病気かも!」
あっという間にみんなが集まってきて、心配して飼育ケースを覗き込んでいる。

「大変だ!」「カエルの病気を調べよう」
「先生、どうしたら治るって書いてあるか読んで」
保育士が図鑑で調べ、子どもたちに「カエルは周りの環境の色に応じて、体の色が変わる」ことを伝える。

「なんで?」「強い虫から身を守るためやん」
「かっこいい!」その後、緑の葉っぱを入れ様子を見てみると、お腹の所から緑になってきた! 石の上にカエルを乗せてみると黒くなってきた! 子どもたちは大興奮で、図鑑に書いてあることを体感していた。

・カエルのエサ探し (7月上旬)

飼育すると決まってから、カエルのえさ探しが子どもの日課になった。畑の野菜に青虫が付いているのを見つけて、「ゲロちゃん食べるかな?」と嬉しそうにげろちゃんのところへ持って行く。

「げろちゃんごはんだよ」と声をかけ、青虫を入れた瞬間、カエルが青虫に飛びついた。

「わー食べた!」「お腹がふくれてる!」
自分たちが探してきた青虫をカエルが食べてくれたことが嬉しくたまらない。ある日、サツマイモにいたバッタを見つけて、「これも食べるかな?」と飼育箱にやってきた。

やっぱりあっという間に食べた。次の日から子どもたちは、バッタ取りに夢中になった。

ある日、畑でバッタを狙うかまきりを発見!
子どもが思わず「バッタさん逃げて!」と声をかけた瞬間、「食べられた!」(衝撃的な出来事)
「怖い! やっぱりカマキリは畑で一番強いんだ!」

カエルを子どもの見えやすい場所に置く。毎日エサやりなどで世話をする機会をつくる。

いつでも図鑑を見たり、野菜カード、昆虫カードで遊べるように用意しておく。

◎親しみを持って毎日見ているからすぐ変化に気づいた。

●様子を見守り、個々の思いに共感しながら、子どもの思いを繋げ、解決できるよう一緒に考える。

◎自分なりの考えを話している。

◎知ったことを「自分たちで試してみたい。」思いがわいてきた。

◎生き物を育てながら、食物連鎖を知る。(食べる、食べられる関係)

*子どもにとってどちらも(カエルも青虫も)かわいがっている生き物同士。それが食べる、食べられる関係であることを、子どもはどうとらえているのだろう。様子を見てみると、3歳児にとっては、目の前で触れ合っている虫が一番(ここではカエル)のように感じる。

●観察を続けることで、生き物には命があり生活があることを実感していけるようにする。

まさに自然。一瞬にして、ドラマチックな環境を子ども達の目の前に設定してくれた。

振り返り: カエルを飼育し、いつでも見られるところに置くことで、継続して様子を見ることができ、いろいろな変化に気づくたびに、新たに知識を広げる活動につながっていった。友だちと一緒にドキドキしたり、悲しくなったり、嬉しくなったりすることは、子ども達の心をぐんと近づけた。そして、そこで知ったことは、心通わせる共通体験となった。

子どもが関心を寄せられる環境設定、そしてそこで生まれる子どもの気づきをしっかりとらえることが大切だと感じた。

事例③ カエルになって遊ぶケロ！（10月～12月）

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる姿
<p>・絵本「10匹にかえる」のお話から（10月中旬～）</p> <p>「ぎろろんやまと仲良しかえる」のお話を読む。クラスにカエルがいることで、お話に気持ちがぐっと入るのがわかる。そこで、近くの公園の池をお話に出てくる池に見立てて遊ぶことにした。</p> <p>池につくといつの間にか子ども達はカエル語で話し始めた...</p> <p>「おはようケロ」「元気ケロか?」「〇〇ケロ」</p> <p>池の橋を渡りながら色づいた赤いカエデの葉っぱを見つけた子ども達「ザリガニがいる!」と大騒ぎ。すぐに何人かの子どもが赤いカエデの葉っぱを両手に持って、「ザリガニ」に変身していた。</p> <p>「ジャキーン!美味しそうなカエルの声がするぞ～。食べちゃうぞ!」するとカエルたちが「助けて～!」と逃げ出し、お話のようなザリガニとカエルの追いかっけこが始まった。</p> <p>周りにある自然が次々とお話遊びの遊び場になった。</p> <p>公園で保育者がキノコを見つけて「しゃっきりだけ見～つけた」と言うと、「違う!色が違う!形が違う!ぎろろん山にしか生えてないよ。」「さ～お母さんを助けるために早くぎろろん山に行こう!」と子どもたちで話が盛り上がり、遊び始める。</p> <p>海に行きカニを見つけると</p> <p>「カニさん、ぎろろん山に行く道が解らないの。ぎろろん山はどっち?」とやり取りが始まり、石ころだらけの干上がった川の道や公園の岩場がお話に出てくる「ギロロン山」になった。</p> <p>暗い木の茂った場所に行くと「なんだか怖いね」「ひんやりするね」「コウモリが出て来そう!」とすぐにお話を思い出し、自分がコロちゃんになったように不安になっていた。</p> <p>こうして、周りの自然も利用することで、子ども達はお話の世界をさらに楽しむようになった。</p>		<p>●保育者の援助</p>	<p>環境設定</p>	<p>◎学びにつながる姿</p> <div data-bbox="831 248 1477 309" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>カエルが出てくる絵本や図鑑を用意する。</p> </div> <p>◎3歳は、見たこと、経験したことがそのまま表現につながる。「なりたいもの」になることが「楽しい!」</p> <p>◎赤いカエデからザリガニをイメージした子ども。見たものから遊びを創造している。</p> <div data-bbox="858 651 1091 797"> </div> <div data-bbox="1238 651 1477 797"> </div> <p>●お話の世界に気持ちが向くように子どもに声をかける。</p> <div data-bbox="826 920 1078 1111"> </div> <div data-bbox="1166 920 1442 1111"> </div> <p>◎お話に出てくる生き物に、実際に触れたことでさらにお話のイメージが膨らむ。そして、なつてみたい!と気持ちが動く。この日からカニになる子は上手に横歩きをはじめた...</p> <div data-bbox="826 1290 1110 1447"> </div> <p>◎子どもたちは実際の世界とお話の世界を行ったり来たりしながら遊びを深めている。</p>

振り返り：子どもが自然に関わり、興味・関心を持って遊んだ経験や自分が知ったこと、人(友だち・保護者)から聞いたことが遊びのベースになり、表現遊びにつながっている。言葉だけではなかなか表現できないことも、身振りで表現することで友だちに伝わり、遊びに広がりを感じた。遊びの中で実体験したことで、発表会の舞台の表現遊びでも思いを寄せて遊ぶことにつながったと感じ、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わうことにつながったと感じる。また、今までの活動(遊び)を通して、いつも訪れていた公園や自然の中に新たな発見をし、その発見を友だちと共有する楽しさ、さらに図鑑を使ってその発見を深めるなど、子ども達の育ちを感じさせられた。

事例④ さよならカエルちゃん（3月）

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる姿
	<p>寒くなり、毎日飼育ケースの上にしがみついて眠っていることが多くなったカエル。動きが鈍く、エサを捕まえられない日もあって、子ども達は心配でたまらない。</p> <p>「もっとエサをあげたら元気が出るかな」と畑にえさ探しに行くが、畑を掘っても掘ってもエサが見つからない。「いないね?」「隠れているのかな?」「寒いからまだ眠っているのかな?」「それ冬眠言うねん。おとうさんが教えてくれた」「そうか、寒いから虫も冬眠しているんだ。」「暖かくなったら虫も出てくるのかな」そう予想した子どもたちは、日差しが温かい日は、網とかごをもってワクワクしながら畑に向かうようになった。</p> <p>・進級するにあたり、カエルも一緒に進級するか子ども達みんなで考えた。「自分でエサが取れるほうがカエルちゃんは嬉しいかな」「広いところがいいかな」などいろいろ考えて、いつでも会うことが出来るように、保育所の池に逃がしてあげることに決まった。</p> <p>池で飼育ケースの蓋を開けると、カエルはふちに止まってかわいい目でじーっとみんなの方を見ていた。「お家が気に入っているのかな?」「さよならしたくないのかな」「かえるちゃん」と呼んでいる。</p> <p>やっとケースから跳びだすとみんなから自然と拍手がおこっていた。カエルは水の中に跳びこむと、必死で動いている。「溺れてるのかな?」心配して息をのんで見守っている。無事に陸に這い上がることが出来たカエルに「元気でね」「また遊ぼうね」「帰りにまた来るからね」と子ども達が声をかけている。そして「きっと、お母さんのところに帰ったんや!」と安心したようにつぶやいていた。</p>			<div data-bbox="842 273 1509 427" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>興味を持ったことを自由に見たり、調べられるように、冬の生き物の過ごし方が解りやすい科学の絵本や図鑑を用意しておく。</p> </div> <p>◎どうすれば、カエルが元気になるか試行錯誤している。</p> <p>◎実際に見て知ったこと、聞いたこと、本や図鑑を通して知ったことを友だちに知らせ、共有している。</p> <p>◎気温の変化を肌で感じ、そのことを虫探しと結びつけて考え、期待を持っている。</p> <p>●カエルも自分たちと同じように、新しい場所で生長していくことを喜べるようにする。</p> <p>●保育所にも池があることを子どもたちに伝える。</p> <p>◎世話をして共に過ごしたことで、離れることに複雑な気持ちがある。</p>
				

振り返り：一年間、自然にいっぱい触れて過ごしてきたことで、子ども達の自然に対するやさしい思いにたくさん学ばされた。保育者が何気なく小松菜の脇目を摘むのを見て、「何で抜いちゃうの!」と真剣な表情で怒った子ども達。説明もせず無神経な行動したと反省した。子ども達に理由を話すと、「持って帰りたい」ということになり、一人一本ずつだが持ち帰ることにした。自宅やおじいちゃんの畑で育て、「みんなで食べました。美味しかったです」と保護者から言っただき、保育所だけでなく家庭も巻き込んだ食育の大切さも改めて感じた。

〈考察〉

3歳児は、ダンゴ虫、カエルなど身近な生き物に興味津々で、見たり触れたりすることで、感動をストレートに表し、またその生き物と自分とを同化させ、「ダンゴムシになりたい！(D)」とすぐに身体で表現することにつながっていった。その気持ちを汲み、いろいろな遊びに発展させたことで、ダンゴ虫ごっこやカエルごっこが大いに盛り上がり繰り返して遊ぶ楽しい遊びとなった。絵本を見ても実際に体験している部分では理解が深まり、お話に入り込みやすいのだと感じた。また絵本の世界で想像力を働かせることで、実際に触れる生き物への関心がさらに深まったとも思う。自然に触れる実体験と表現遊びが相互に関わることで、子どもの経験はより豊かになっていったと感じる。

畑で季節の野菜を育て、そこに来る様々な生き物に出会い、いつの間にか子ども達は、野菜や生き物と優しく会話をしていた。自然に触れる経験の中で、子ども達はたくさんの喜びや感動、驚きなどを味わっており、目をキラキラさせて、知っていること、見たことを一生懸命表現し、伝えようとしてくれた。そんな個々の気づきや思いをクラスの中に広げていくことで、友達と一緒に共通理解(1人のDが友だちと一緒にDになる)しながら遊びを楽しむことにつながったと思う。生き物に心を寄せる、様々な感情体験や仲間と共感しあう経験が、色々な世界を知るきっかけとなり、豊かな学びへの意欲を育み、科学する心を育てる土台になるのではないかと考える。

日々新しい体験をし、「これ何?」「どうして?」「何で?」と小さな発見や疑問から、子どもの興味が生まれ、それを膨らませ、友だちに繋げていくことが、保育者の大切な役割だと思う。子どもは自然と遊ぶことで、色々なことを感じ気づいて感性が育つ。五感をいっぱい刺激することが、科学する力に繋がると考える。今後もそんな感性的な出会いをたくさん仕掛けて遊んでいきたい。

実践② 4歳児

夏野菜に親しみ、感覚を豊かにする
～やりたい！知りたい！仲良くなりたい！～

事例① 野菜の赤ちゃんがやって来た！（5月初旬）

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる姿
<p>5月初旬</p> <p>*何の野菜か知りたい！</p> <p>黒いポットに入った2種類の夏野菜の苗を保育者が持ってくる。「お野菜の赤ちゃんを連れてきたよ」と話すと、A児「小さいね、かわいい！」B児「何の野菜だろう？お野菜だいすき！」C児「キャベツじゃない？それとも胡瓜かな？」と口々に思ったこと、感じたことを言い合っている。</p> <p>4グループに分かれ、1ポットずつ苗を渡し、「野菜の赤ちゃん（苗）の名前」が何かを話し合うことになった。</p> <p>*においてみたい！触ってみたい！ (トマトの苗グループ)</p> <p>D児「見て、毛があるよ」E児「葉っぱが小さいね」など、近くの友だちと気づいたことを言い合っている。</p> <p>野菜の絵本と苗を見比べながら、「これと似ているね」「葉っぱのかたち、ギザギザが一緒だね」と気づく児がいた。</p> <p>保育者に声をかけられ葉っぱを触る。D児は「すごい！触ったらトマトみたいな匂いがした！」と驚いていた。E児も真似をして「本当だ！トマトだ！」とD児の発見に共感していた。</p> <p>(カボチャの苗グループ)</p> <p>話し合いが進みにくいグループには「葉っぱの形は丸かな？鉛筆みたいに細いかな？」と保育者が声をかけたことで、葉っぱの形に注目しはじめた。</p> <p>F児が「丸い！けど、ちょっとへこんでいる！」と気が付く。それを聞いたG児が指で丸をつくり、「こんな（丸い）の！」としぐさで表現する。</p> <p>しぐさで表す「丸いかたち」はグループ内の他児にも広がり、「丸くてちょっとへこんでいるものを探そう」と共通のイメージと目的が生まれる。本をめくりながら似た葉を探し、「かぼちゃ</p>	<p>●保育者がやさしく野菜の苗に触れることで子どもにも大切に扱うことを伝えていく。</p> <p>◎新しい物、初めての物に対しての好奇心が高まっていることが感じられる。身近な野菜を思い浮かべて子どもなりの予測を立てていた。</p>	<p>●保育者がやさしく野菜の苗に触れることで子どもにも大切に扱うことを伝えていく。</p> <p>◎新しい物、初めての物に対しての好奇心が高まっていることが感じられる。身近な野菜を思い浮かべて子どもなりの予測を立てていた。</p>	<p>環境設定</p>	<p>◎学びにつながる姿</p>
				<p>何のお野菜の赤ちゃんなのか？</p>
			<p>話がしやすいように、またみんなが苗に触れやすいように4～5人の小集団にした。</p>	
			<p>夏野菜の絵本を用意し、苗と比べられるようにした。</p>	
		<p>◎形を対比できる子どもは絵本の葉っぱと見比べながら「似ている」を探ることができている。</p> <p>●感覚器官を用いた経験ができるように苗に触れたり匂ったりしていいことを伝えていく。</p> <p>◎見るだけでなく、触って匂うことで、多彩な経験の獲得が保障され、感動する気持ちを友だちに伝えることにつながった。</p> <p>●注目する視点に気づかせることで、考えるきっかけを作っていく。また子どもがイメージしやすいように身近な物や形を例えた言葉を選ぶようにする。</p> <p>◎自ら発見した時は目が輝き、生き生きとしている。F児の気づきに対してG児が関心を示し、しぐさで表現してくれたことは共感性が生まれた体験である。グループの中に共通の課題意識が生まれると、仲間意識が高まり、モチベーションも高まると感じた。</p>		

かもしれない！」と結論づけていた。

***みんなで言いたい！**

最後にグループごとに「カボチャ！」「トマト！」と発表し、どのグループも正解する。友だちと一緒に「やったー！」と喜んでいた。

***お世話をしたい！**

畑の土に埋める際も4～5人で優しく苗を運び、丁寧に土をかぶせる姿が見られた。「お腹すいているからお水あげないと！」と言うF児をきっかけに「ぼくもしたい」とじょうろを取りに行き、さっそく水やりをしていた。



かぼちゃかもしれない！

グループごとの考えを発表する場を設定し、意見を聞き合えるようにする

●全体から個人へ、個人からグループへ、グループから全体へと返していくことで気づきを皆で共有していく。

◎見て、におって、触って、驚いて、と、たくさんの経験をしたからこそ、トマトとカボチャの苗に対して、全員が親しみを感じ、自分たちで大切に育てようという気持ちが生まれていた。

振り返り：自分たちで世話をしていく夏野菜との初めての出会いである。

保育者に野菜の名前を覚えてもらうのではなく、友だちと相談しながら子どもが自ら答えを探し出すことで親しみがわき、野菜の名前が子ども達の心に印象深く残ると感じた。

また、小集団での共通の経験が仲間との結びつきを強めることになり、モチベーションも高まっていた。

子どもは情緒が動くことで自ら「学ぼうとする」。大人から「教えられる」のではない。環境に対して、好奇心や探求心をもって関わり、発見を楽しむ姿を大切にしたい。

事例② カボチャのツルがプールに入りたがっている！（6月中旬）

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる姿
<p>カボチャの世話を続けながら、ツルがどんどんと伸びていく様子を楽しみにしている。「先生！畑から飛び出しそう！」「壁をのぼり始めた！」など毎日新しい発見と驚きがあり、友だちと一緒にツルに注目していた子どもたちである。</p> <p>*みんなに伝えたい！</p> <p>ある朝A児が「大変！カボチャがプールまで行ってしまう！」とみんなに呼びかけた。畑に隣接しているプールまでかぼちゃのツルが伸びていた。「それは大変！」とばかりに皆が集まってきた。</p> <p>B児「カボチャさん、プール大好きなのかなあ？」C児「暑いからプールに入りたいのかな？」D児「だめだぞー！ここは私たちのプールだぞ！」などと、友だちと一緒にカボチャのつるに対して感じたことを言い合っている。</p> <p>*長さを比べたい！</p> <p>「カボチャのツルってどの位の長さなのかな？」と保育者に声をかけられ、両手をいっぱい広げ「この位！大きい！」とE児。腕を合</p>		<p>●「昨日は〇〇までだったのに今日は△△まで伸びたの！？」と具体的に比較対象を言葉にし、イメージしやすいようにする。</p> <p>◎カボチャが畑を超えたばかりか、自分たちの生活スペースであるプールに入って来たことは大変な出来事であった。普段は物静かなA児も、驚きをいち早く伝えなければとびっくりするほど大きな声が出ていた。</p> <p>◎カボチャに親しみを感じている子どもたちであるからこそ、カボチャの気持ちまでも想像したり、話しかけたりする姿が見られた。</p>		<p>毎日継続して、カボチャの生長を見ることで、変化に気づくことができる。</p>
				<p>かぼちゃさん、プール大好きなの？</p>

わせてみるE児を見て「ツルの方が長いみたい」とF児が気づく。「Eちゃんの腕だけじゃ足りない時はどうしようか？」と声を掛けられるとF児が「手をつないだらいい！」と言い、E児、F児に加えてG児も参加して手をつなぎ合い、カボチャのツルとの長さ比べをしていた。「どこまで伸びる気なのだー！」とツルの長さに驚く姿が見られた。

●ツルの長さに心を動かされている機会を逃さず、より具体的にツルの長さについて視点を絞っていく。
 ◎どのくらい？と聞かれて「この位！」と腕を広げる姿に、数量に対して自分の体が基準になっていると感じた。
 ◎ツルの長さを想像する時に、自分の腕だけではならず友だち二人と手を繋いでも足りないくらいだったという具体的な感覚が、この体験を通じて得られたのではないかと感じた。保育士の「どうしようか？」という声かけが、手をつなぐという「新たな長さの表現方法」につながった。

振り返り

毎日の世話を通して親しむことで、カボチャがより身近な存在になっている。特にツルの伸びるスピードは速く、変化が目に見えて分かりやすいため、子ども達にとって発見と驚きの連続であった。

ただの「長いツル」ではなく、「柵を越えてプールに入ってしまうくらい長いツル」は子ども達の心を動かす。A児の大発見にクラスみんなが大騒ぎになり、共感が広がっていった。この時期はプール開き前であり、「早くプールに入りたい」気持ちをもっていた子ども達である。カボチャの気持ちに同調したり、自分たちよりも先にプールに入られたことを悔しがったりと、たくさんの感情が動いていた。プールに入ろうとしていたツルを「ここは子ども達の入るプールだからね。カボチャさんは畑に戻ってね」と声をかけながら保育者がツルの方向修正を行う。その横で「そうそう。かぼちゃさんにはちゃんとお水をたくさんあげるからね」と言いながら見守る子どもの姿もあり、「野菜と仲良くなる」子どもの思いが現れていた。

事例③ 野菜クイズしよう！（7月初旬）

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる力
<p>～何の野菜でしよう遊び～:リーダーが収集コーナーから野菜を選び取ってカゴに入れ、皆に見えないように布をかぶせる。 ・他の子どもはリーダーに質問をして何の野菜が入っているかを考える。最後は目を閉じて野菜に触れ何の野菜が入っていたかを答える。</p> <p>*野菜クイズしたい！ 「野菜クイズしよう！」とA児が誘うとB, C, D児が「しよう、しよう！」と集まってくる。「僕リーダーね」とA児は3人の友だちに声をかけ、野菜を入れるカゴを持って部屋を出る。「目をつぶって待つよ」とB児が声をかけるとC, D児も目を閉じて待つ。C児は「何かな、何かな！」と心を弾ませている。 A児は収集コーナーに行き、好きな野菜を一つカゴに選び、布を被せて皆のところに戻ってきた。</p>			<p>環境認識の遊びとして夏野菜（トマト、ピーマン、トウモロコシ、オクラ、キュウリ、ナス）を収集棚に展示しておき、いつでも触れられるようにする。</p> <div data-bbox="774 1411 901 1473" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">収集棚</div> <div data-bbox="750 1478 1165 1769"> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・野菜実物 ・成長過程ボード ・野菜絵合わせカード ・野菜メモリー ・窓開けクイズ ・絵本 	<p>◎子どもたちの中でルールが浸透し、役割が分かって遊ぶことができている。A児が何の野菜を選んでくるか、ワクワクしながら待つ様子が伺える。</p>

***聞きたい！**

質問タイムに入る。

B児「白い花は咲きますか？」

A児「咲きません！」

C児「黄色い花は咲きますか？」

A児「・・・咲きます！」

D児「ツルは伸びますか？」 A児「伸びません！」

この時点でB児「もう分かっちゃった！」と喜ぶ。

***触りたい！**

次に順に触っていき、触感を確かめる。

(カゴの中を触ってみて)

B児「・・・やっぱり！」 C, D児「分かった！」

A児「何の野菜でしょう？」 B, C, D児「・・・トマト！」 A児「大当たり！」 B, C, D児「やったー！」と喜びジャンプをする

***次はリーダーをやりたい！**

B児「次は僕がリーダーするから、皆目をつぶっていてね」 A, C, D児「いいよ！」

この後リーダーを順に交代して遊びが続いていく。

野菜クイズ

友だちの質問を聞いてイメージするよ

白いお花は咲きますか？



◎黄色い花が咲くということで、キュウリかトマトか、カボチャのいずれかという予想をつけた児もいた。

●質問が停滞した時には葉っぱのことなど、違いが出るような質問をする援助を行っていく。

◎触る前に答えが分かったことがうれしい。さらに触ってみて自分の考えが当たっていることが分かり、喜びがさらに大きくなった。

◎友だちと一緒に正解したことが嬉しく、大きな声で歓声を上げて飛び跳ね、喜びを全身で表現する姿が見られた。



何のお野菜か分かった！

役を繰り返し交代して遊ぶことができるように、時間を保障していく。

振り返り：実物をいつでも触ることができる収集コーナーは子ども達の関心も高く、野菜を触りながら料理の話や買い物の話など、経験に基づいた会話を友だちと楽しむ姿が見られた。

どの野菜にどんな花が咲くか、葉っぱはどんなものかは、「窓開けクイズ」を通して実際に畑を見に行ったり写真を見たりして、知識として積みあがっていった。

そこで、「触る」という実体験と、「知った知識」の二つを組み合わせ、「何の野菜でしょうクイズ」を始める。最初は保育者がリーダー役となり自由あそびの中で取り入れていく。質問するという意味も繰り返す中で理解し、最初は友だちと同じことを聞いていた児も違う質問ができるようになっていった。質問が難しい児には、どんなことを聞いても大丈夫だよと、肯定的に関わっていき、誰でも参加できる雰囲気を作っていくようにした。クイズだけでは分からない児も触って分かるという安心感もあった

子ども達の中ですぐにリーダー役をしたいという気持ちが芽生える。友だちの質問に対してすぐに答えを言ってしまったり、触ってすぐに答えを言ってしまったりと、待てないこともあるが「まだ答えは言わないんだよ」と言いながら忍耐強く頑張る姿も見られ、よりクイズを楽しもうとする姿があった。

自分がリーダーを出来ること、実物を使うことなど、モチベーションが高まる遊びであり、野菜に触れた経験が知識として遊びの中で生かせることも喜びや楽しさにつながったのではないかと思う。



それぞれの野菜の咲く花の色、葉っぱの形など興味を持って見比べる姿が見られた

事例④ カボチャからスイカのおいがした！（8月下旬）

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる姿
<p>収穫したカボチャを追熟させ、食べることにした。</p> <p>*カボチャを食べたい！ 保育者「カボチャさんにお話しを聞いてみます」（カボチャに耳を当てて）「ふむふむ。おいしくなりましたよ。食べてくださいだって。どうする？」「…早く食べたい！」と子どもたち。満場一致で収穫のカボチャを料理することにした。</p> <p>*経験したことを伝えたい！ 早速包丁を当てて切り始める。力を入れても中々切れない様子を見て A児「皮、カチカチだもんね！」 B児「すごく硬そう！」「先生、頑張れ！」と歓声上がる。 半分に切れたカボチャの断面を見せる。「わあ！絵本と同じ！」と感激する子ども達であった。</p> <p>*におってみたい！ 断面を見た後、種とわたをスプーンで取り、順番に回していくようにした。 A児「なんか、においする！」 B児「スイカのおいだ！」 C児「本当だ！スイカだ！」 D児「キュウリのおいもするよ」 E児「本当だ！キュウリだ！」 と匂いを嗅いでびっくりする子どもたちであった。 保育者も匂ってみる。 「本当だ！カボチャなのにスイカの匂いもする！でもキュウリのおいもする！大発見だね！すごい！」と子どもの気づきに共感した。</p>		<p>●突然クッキングを始めるのではなく、今まで大切にしてきたカボチャにも話かけたうえで、皆が納得してから始めるようにする。</p> <p>◎収穫棚にあった「野菜のおなか」の絵本を通して野菜の断面図へ関心が深まっている。</p> <p>◎何度も実物を触った経験から、カボチャの皮は硬い→包丁でも中々切ることができないという認識がうまれ、思考に繋がっている。</p> <p>●一つひとつの行程を皆で共有し、楽しむようにしていく。</p>		<p>収穫したカボチャは2週間ほど収集コーナーに飾っておき、子どもが持ち上げたり触ったりできるようにしておく</p> <p>◎匂いを嗅いで、率直な感想を言い合っている。このクッキングの前に3歳児クラスの収穫物の「スイカ割り」に参加させてもらった経験がある。スイカを割った時、部屋中に広がった匂いもよく覚えていたのではないか。</p> <p>●子ども達の発見や驚きに共感し、十分に認めていく。この後、匂いだけでなく、その他の共通点（花の色、ツルのこと）などにも気づけるような話をしていく。</p>
				

振り返り：野菜を味わうことは、子どもの好きな体験である。味わうためのひとつひとつの行程の中に、子どもたちの様々な驚きや発見があった。

同じウリ科であるキュウリとスイカとカボチャが同じ匂いがするという発見は、保育者自身も初めて知ったことであり、子どもたちの率直な気づきに驚かされた。見たり、触れたり、匂ったり、味わったり。野菜と仲良くなったことで多くの学びにつながり、「キュウリとスイカとカボチャはウリ科。だから同じ匂いがする」ということが、子どもたちの中に知識として蓄積されたことを感じた。

< 4歳考察 >

3か月の間、夏野菜の世話をし、身近な環境に子ども達が自ら関わっていく中でたくさんの発見や驚きが生まれた。「やってみたい！(D)」と子どもの心が動く時、子どもは自ら学ぼうとし、簡単に物事を認識し、理解(C)をする。保育士は子どもの心が動いた点に着目し、そこを広げていくような環境を提供していく。環境の中に好奇心、探求心の種(C→Aに向かう力)をどれだけ多くちりばめることが出来るかが重要だと考えられる。保育において、いつでも子ども主導であり、子どもが主役である。

取り組みの中で、共感し合える友だちの存在も必要不可欠であった。楽しさも驚きも友だちと味わうことで(友だちと一緒にD→C→Aを経験することで)より学びが深まった。また、友だちとの遊びやお互いに得られる体験によって、社会的能力が形成され、協力、適応、協同の能力が育てられるのだと考えられる。

身近な環境との絆、友だちとの絆の多さが、環境と子どもとの情緒の結びつきを太くすると考える。そしてその絆が「学びに向かう力」になり、「科学する心」にもつながっていくと推察する。

実践③ 5歳児 7月～3月
プレゼン活動を通して伝えあう楽しさを感じる
 ～みんなに伝えたい～

子どもの生活する姿をじっくり観察してみると、「自分の意見は言うが、友だちの意見がなかなか受け入れられない」「おしゃべりはできるけど、発表となるとうまく話せなくなってしまう。」「遊びや生活の中で困っていても誰にも言えない」など、コミュニケーションの課題が見えてきた。小学校になると今よりももっと大きい集団で生活することになる。その中で、自分の気持ちを話す力、相手の話を聞く力、意見を交わし合う力は必ず必要になる。そして一番身に着けてほしいと思っている力が、助けてほしい時に「SOS」が言える力だ。そこで、そういった力をプレゼン活動を通して育めないかと考えた。プレゼンは、自分から相手への一方通行の発表と違い、自分から相手、相手から自分の双方向のコミュニケーション活動だ。朝の全体体操の時に、体操名を紹介することで少し自信がついてきていた子どもたちだったので、一歩進んだ形のプレゼンに子どもも興味を持つのではないかと考えた。そこで、子どもが親しんでいる身近なもののプレゼンから始めることにした。

事例① この絵本が好きな理由はね・・・(7月初旬)

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる姿
<p>*クラス図書館</p> <p>いつでも絵本に触れることが出来るように、まず図書室で自分の好きな絵本を一冊ずつ選んでクラスに持ち帰り、「びわ組図書館」を作ることにした。</p> <p>好きな一冊ということで、子ども達はいろんな絵本を手にとって中を確認、「とっておきの一冊」になるよう時間をかけて選んでいた。クラスに戻り絵本を並べて図書館が出来上がると「面白そうな絵本がいっぱいになったね。どうしてその本を選んだのか、誰かみんなに教えてくれない？」と声をかけた。するとA児が「できるで！」と立候補してくれた。</p>		<p>●子どもが自由に絵本に触れ合う姿を見守る。</p> <p>◎1冊を入念に選んでいる。</p>	<p>保育室内に絵本のコーナーを設置する。</p>	<p>◎子どもが納得いくまで選ぶことが出来る時間</p> <p>◎見やすい、取り出しやすい位置の絵本を置く</p> <p>◎日頃は、聞かれたら答えるけれど、自分から意見を言うことが少ないA児が、自分の好きな1冊ということで話したい気持ちが膨らみ、心が動いたと感じられた。</p>

*初めてのプレゼンスタート

「僕が選んだ絵本は〇〇です。レストランにオバケが食べに来て面白いです」

「面白そうね。誰かA君に聞いてみたい事ある？何でもいいよ」

しばらく様子を見てから、保育者が「誰に読んでもらいましたか？」と質問をすると「お母さんに読んでもらいました。」と答える。このやり取りを聞いて、「レストランでは何がおいしいですか？」「オバケは怖いですか？」などの質問が子ども達から出るようになった。

*プレゼンって面白い！

プレゼンを終えて保育者が「みんなに話してみてもうどうだった？」とA児に問いかけると、「みんなの前で緊張した。」「でも面白いところが言えたからよかった。」

B児「知らない絵本だったから面白かった。」友だちの話聞いて、もっと聞きたいなとか、これってどういうことかな？と聞くことは難しいかな？

「先生が初めに聞いてくれたので、やり方が分かった。」

「頑張って聞いたらA君が答えてくれて嬉しかった。」「面白かった。」

「何て言ったらいいかわからなかった」A児は「聞いてくれて嬉しかった」「なんて答えようか考えた」と話してくれた。

*おうちの人にも伝えよう！

子ども達がお迎えに来た保護者に口々に図書館のことを伝えている。

「お部屋に図書館ができたよ！」

「僕が選んだ本はこれ！」

「〇〇ちゃんのお母さん聞いて、僕、この本借りた」「ママもその絵本は知ってる。」

「今日、絵本の発表をした。」

「明日、私の発表の番や。緊張する～」

保護者は「ちゃんと話せたの？」「話してみてもうどうだった？」

「今度、この絵本を借りて帰ろうね」など親子で感想を伝え合う姿が見られた。

●不安なくプレゼンができるように見守り、質疑応答を実践の中で楽しめるよう援助した

◎緊張している様子が見られるものの、自分が好きな絵本を友達に伝えられることに、充実感もある。

◎保育者が見本を示すことで、「質問」の意味を理解し、「なんだか楽しそう」と意欲や期待感が増した

●プレゼンでは、子どもの「やりたい」思いに寄り添うように心がける。

◎友達の前で話すことは緊張するが、同時に友だちから反応が返ってくるうれしさを感じた。

◎友だちの様子をよく見て、プレゼンのやり方を知ろうとしている。また、自分もやってみたい。と心が動いている。



こんなことをして遊んでいます！

●子どものプレゼン内容は、上記のようにねらいも含めてすぐに保護者に発信し、協力や連携を得られるようお願いした。



私の順番はいつかなあ？

◎初めて行ったプレゼンのことが強く印象に残っていたのだろう。今度は迎えに来た保護者に子どもたちがプレゼンしていた。

保護者もプレゼンに興味を持ってくれ、子どもに問いかけることが増えた。順番に絵本のプレゼンを繰り返すことで、「今日はどんな絵本かな。」と保護者も一緒に楽しみながら、「伝えたい」「聞きたい」気持ちが高まった。

振り返り：子どもたちは、自分の考えを友達に伝える時、うまく話せなかったり、小さい声しか出なかったりすることを何度も経験し、その中で、自分なりの言葉で表現する方法を編み出していった。聞く側の子どもは、友達の話聞く時にはどうすればよいか、聞く態度を考えるなど、相手のことを考えて行動する気持ちも育まれていった。友達の思いに気づき、友達に寄り添いたいと感じた時にも心が動いていると感じる。そして、保育者も子どもの心の動きに寄り添いながら一緒に心を動かしていくことが大切だと思った。プレゼン活動をしたことで伝えることの楽しさと達成感を味わい、話を聞くことで、「どうしてですか?」「何でそう思ったのですか?」と、もっと知りたい、共感したいという気持ちと探求心が育まれていった。これからも自分の言葉で伝え合うことで楽しむ経験を大切にしていきたい。

事例② みんな、聞いて～！（7月下旬～）

子どもの姿	子どもの心の動き	●保育者の援助	環境設定	◎学びにつながる姿
<p>保育者が「お休みの間に『こんなことあったよ』『こんなことしたよ』『面白いものみつけたよ』何でもいいので、みんなに伝えたいと思うことがあったら、おうちの人と相談して写真とか持ってきていいよ。」と子どもたちに声をかける。</p> <p>*海に行ったんだよ！（8月） C児が海に行った写真と拾った貝を持ってきた。「今日、写真持ってきた。」 「わあ、楽しみ！どうやってプレゼンする？」 「聞いてくださいって言う」 「ルールはそれだけでいいの？」 「大丈夫」 「よし、やってみよう」</p> <p>C児「家族みんなで海に行きました。お泊りをして海で遊びました。貝を拾ったり、海で泳いだりしました。何か質問はありますか？」 D児「その海はどこにありますか？」 C児「わかりません」 E児「家族って誰ですか？」 C児「パパとママとお兄ちゃんと僕です」 F児「貝は何の貝ですか？」 C児「わかりません」 G児「何に乗って行きましたか？」 C児「車で行きました」「もう質問はないですか？これで終わります」 保育者が「どこの海に行ったかわかったら教えてくれると嬉しいな。」と声をかける。 翌日、A児が保育者に話しかけに来る。 A児「海って、久美浜やった」 「久美浜は、どこにあるの？」 「京都やって」 「地図で探してみよう」</p>	<div data-bbox="785 689 1469 904" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>プールとか海に行く？おばあちゃんの家にお泊り行く？お家でかき氷をする？など、夏の遊びなどを具体的な事例を挙げてわかりやすく掲示して知らせ、保護者にも協力を依頼する</p> </div> <p>●子どもに言葉、保護者には掲示で「新しいテーマ」について伝え、イメージしやすいようにした。</p> <p>◎自分の経験を話したいと意欲を持っている</p> <p>◎絵本のプレゼンを経験したことが、自信につながっている。</p> <p>◎友だちの話に期待を持って聞いている。</p> <p>●プレゼン中保育者は子どもを見守り、助けを求めたときに援助をするようにした。</p> <p>◎はっきり覚えている事や、わかることは自信を持って答えている。答えられない時でも、なんとか言葉を探して伝えようとする姿がある。</p> <div data-bbox="767 1592 1086 1832"> </div> <p>僕の楽しかった話を聞いてください</p> <p>◎保育士が次につながるように「どこの海…」と声をかけたことで、「自分で調べてみよう」という気持ちになった。</p>			

そこへH児とI児がやってくる。

「何してるの？」

「昨日のプレゼンの海の名前と、どこにあるかがわかったんだって。今地図で探しているところ」
H児、I児「一緒に探す！」

他にも複数の子どもが集まってきて一緒に探し始める

その後、地図の中に「京都」を見つける。

その場にいた友だちに

「昨日の海は、ここです。京都はここです」と地図を指しながら伝えることができた。

この後、地名調べや場所調べには、地図を見ることが習慣になった。また、地図に載っていない地名があることも知り、家族に聞いてみたり、理由を調べたりするようになった。

*聞いてみたいんやけどなあ… (9月～12月)

プレゼンの回数を重ねていくと、友だちの前で話すことが恥ずかしいと思ったり、質問を思いつくまでに時間がかかり、質問できずに終わってしまう子どもの姿が見られた

そこで、プレゼン後小グループに分かれ、顔を突き合わせて聞きたいことや、全体の場では聞けなかったことを自由に聞く『フリータイム』の時間を設けることにした。

恐竜博物館に行ったプレゼン後のフリータイムでは・・・

「他には何があった？」

「化石掘るところもあった」

「掘った？」「葉っぱの化石が出たで」

「へ～、すごいなあ」

「福井の恐竜博物館は行ったことあるで」

「どの恐竜の化石が好きなん？」

「ティラノサウルスが好き」

「本物なん？」「ちがう。作ってあるやつやった」

遊園地に行ったプレゼンの後のフリータイムでは・・・

「お弁当持っていった？」

「レストランで食べた。」

「何食べたの」

チャーハンとラーメンのセット食べた」



場所は
ここです。

平仮名表記の地図を用意する

◎友だちと一緒に調べたり、発見したり、伝えることに楽しさを感じている。

◎質問に答えられたこと、それを友だちに伝えられたことで、うれしい気持ちがあふれていた。

発表したことをみんなで共有できるようにすぐに表示するようにした。



●子どもの興味・関心の度合いには、ばらつきがある。子ども同士が楽しむための工夫・環境について考える必要がある。

自由に質疑応答ができる環境を設定

◎フリータイムにしたことで、「緊張せずに知りたいこと、伝えたいこと」が聞けるようになり、子ども同士の応答的な会話に発展した。

反面、時間が長くなってくると気持ちが逸れたり、聞きたいことはあるが、まだ躊躇している子どもの姿も見られるようになった。

「一人で食べたん？」

「おばあちゃんと分けたけど」

「びっくりした～。全部食べられるんか？と思ったわ～」など、プレゼンごとに自由な会話を楽しんでいる。普段の友だちとの会話を楽しむように次々と質疑応答を繰り返している。

同じ体験をしている子どもは、自分が体験した事を伝え、共感し、話が弾んでいる。

また、お迎えにきた保護者に友だちのプレゼン内容を伝え、自分もプレゼンをしたいこと、そのためには用意してほしいものがあることも伝えるようになった。

即日掲示を続けたことで、家庭の協力が大きくなり、みんなに話したいと思った時、必要なものをすぐに準備してもらえる環境になった。また、発表を通して保護者と子どもの成長を共感し合うこともでき、子どもが自信を持ち、繰り返すことで達成感も味わうことが出来てきている。

*なんで「てっさ」？（1月）

・朝の挨拶もそこそこにJ児が話しかけに来た。「あんな、おばあちゃんの誕生日の日に『てっさ』食べた。」

「てっさって何？」と尋ねると、

「よく知らないけど、フグの刺身のことらしい。」

「何で『フグの刺身』じゃなくて、『てっさ』って言うの？」「それは知らんけど」

「なんでやろね？不思議やね」と会話をする。

・数日後、J児が「『てっさ』を調べてきたからプレゼンするわ。」といつてきた。

「調べてくれたの？嬉しい！」

「フグの絵も調べて描いてきたし、家でプレゼンの練習もしてきた！」

「楽しみ！」

*「てっさ」のプレゼンの始まり

「てっさについて調べてきたので聞いてください。」

てっさはフグのお刺身のことです。

どうして『てっさ』というかという、フグには毒があるので、当たったら鉄砲に当たったように死んでしまうからです。

●保育者も一緒に参加し、子どもの発表に注目できるようした。質問しにくい子どもも楽しめるよう、一緒に質問したり、雰囲気作りや声掛けを心掛けた



質問してもいい
ですか？

これ知って
るで！



◎近くで写真などを見ながら話すことで、新たな気づきがあり、そのことについても話し合うようになった。また、発表内容を記憶していることが多くなり、お迎えに来た保護者にも詳しく伝え、共通の話題を楽しむようになった。

◎積極的に自分の経験を伝える、質問をする等の会話が多くなっているように感じる。伝えたい気持ちが膨らんでいる。



これは何で
すか？

●子どもの興味が深まるように保育者が声をかけた。

◎気になったことを家族の協力を得ながら自分なりにまとめようと考えている。また事前に練習してくるなど、向上心もうかがえる

◎自分が話したいと思って調べたこと、調べてわかったことをどう話せば相手に伝わりやすいかを考え、話を組み立てている。(プログラミング)

その刺身なので鉄砲の刺身で『てっさ』といいます。『てっちり』という料理もあります。『ちり』は、身をお鍋に入れて煮たら身がチリチリと縮むから『てっちり』といいます。フグは海にいます。僕が食べたのはトラフグです。毒は内臓にあるので食べられません。ヒレも食べられます。お酒に入れて飲めます。子どもは飲めません。何か質問はありますか」

・聞いてた子どもは「フグは見たことがありますか？」と質問し、「本物は見たことはありません。でも図鑑で見たことがあります」と答えている。「毒は食べてみたいと思いますか？」と質問されると「食べたくないです。それは死にたくないからです」と理由も答えていた。

・友だちのプレゼンを聞いて、経験したことだけでなく、自分で考えたこと、気になったことを皆の前で話したいと感じる子どもが増え、卒園する3月まで途切れることなく続いた。総数74回のプレゼンを行い、プレゼン活動を終了した。

振り返り： 表現方法を考え、文章を工夫しながら楽しんでいく子どもの姿が見られるようになった。互いに工夫し合い伝え合う姿を認め合いながら、新しいプレゼンの形を作り上げようとする姿に成長を感じた。またフリータイムを入れたことで、個々の表現方法で興味のある事を満足するまで質問できるようになった。新しい体験をするたびに誰かに伝えたいという思いや、聞きたいという思いが強くなった。保育者は、計画にとらわれすぎることなく、子どもの姿を読み取り、臨機応変に援助する力や環境を構成していく力が必要だと感じた。

考察：5歳児クラスは、プレゼンテーションという新しい形の伝え合いに取り組んだ。はじめは緊張したり、戸惑ったりする姿があったが、パターンを決めることで自信をもって伝えることが出来るようになり、聞いてもらえることが喜びにつながった。その喜びが、より分かりやすく伝えるという意欲につながったと考えられる。工夫することで相手に伝わる、伝わるのがうれしい、うれしいからもっと工夫する、そして、「もっと伝えたい！」と意欲がわく。「伝える」という体験と「聞く」という体験をつなぎ合わせ繰り返し、より深まるように、より広がるように家庭まで巻き込んだ環境の構成が子どもたちの活動を支えたと考える。

おわりに

今年度、“子どもの心が動く瞬間を捉える”ことをテーマに、3点に注目し、記録したことで、子どもが今どういったことに興味・関心を持っているか、どういったことを経験しているか、今感じていることは何か、どのようにしようとしているかなど、子どもの思いを推察することに努め、「子どもの理解」が深まったと感じている。そして、理解することで次の保育に適切な環境の構築に向け取り組むことが出来た。そして、適切な環境を構築することで子どもの活動が継続し、周りの友だちと考え合い、知識を出し合いながら反復と試行錯誤（D→C→A）を繰り返していく中で、「科学する心」が育まれていくことが確認できた。

3歳は、保育所の生活の中で出会った小動物を通して、「自分もまる虫やカエルになって遊びたい（D）」と心が動かされ、友だちと一緒に遊ぶことでさらに発想が広がり、繰り返し遊ぶ楽しさ（C）を味わった。子どもたちが（D→C）を繰り返す姿を保育者がしっかりと受け止め、適切な支援を行うことが、（A）に向

かう力になると考える。

4歳の「かぼちゃのつるの長さを測る」場面では、つるの長さを表現したい(D)と思ったが出来なかった(C)友だちが共感し、自分も一緒にすること(A)でより「かぼちゃのつるの長さ」に近づくことが出来ることに気づいた。友だち同士の考えや思いが結びつくことで遊びが深まった。

5歳の「プレゼン」は、友だちの発表(D)を見る、聞くことで刺激を受け、子ども自身の中でC⇒Aを繰り返す。その繰り返しの中で、自ら話の順番を考えたり、表現方法を工夫したりする姿が見られるようになり、友だちや家族の方に興味をもって聞いてもらうことが自信になった。その自信は、「もっとこうすればいいかもしれない」と改善(A)しようとする意欲につながった。そして、その意欲は新たな活動に対する実行(D)を生み出す可能性を持っている。

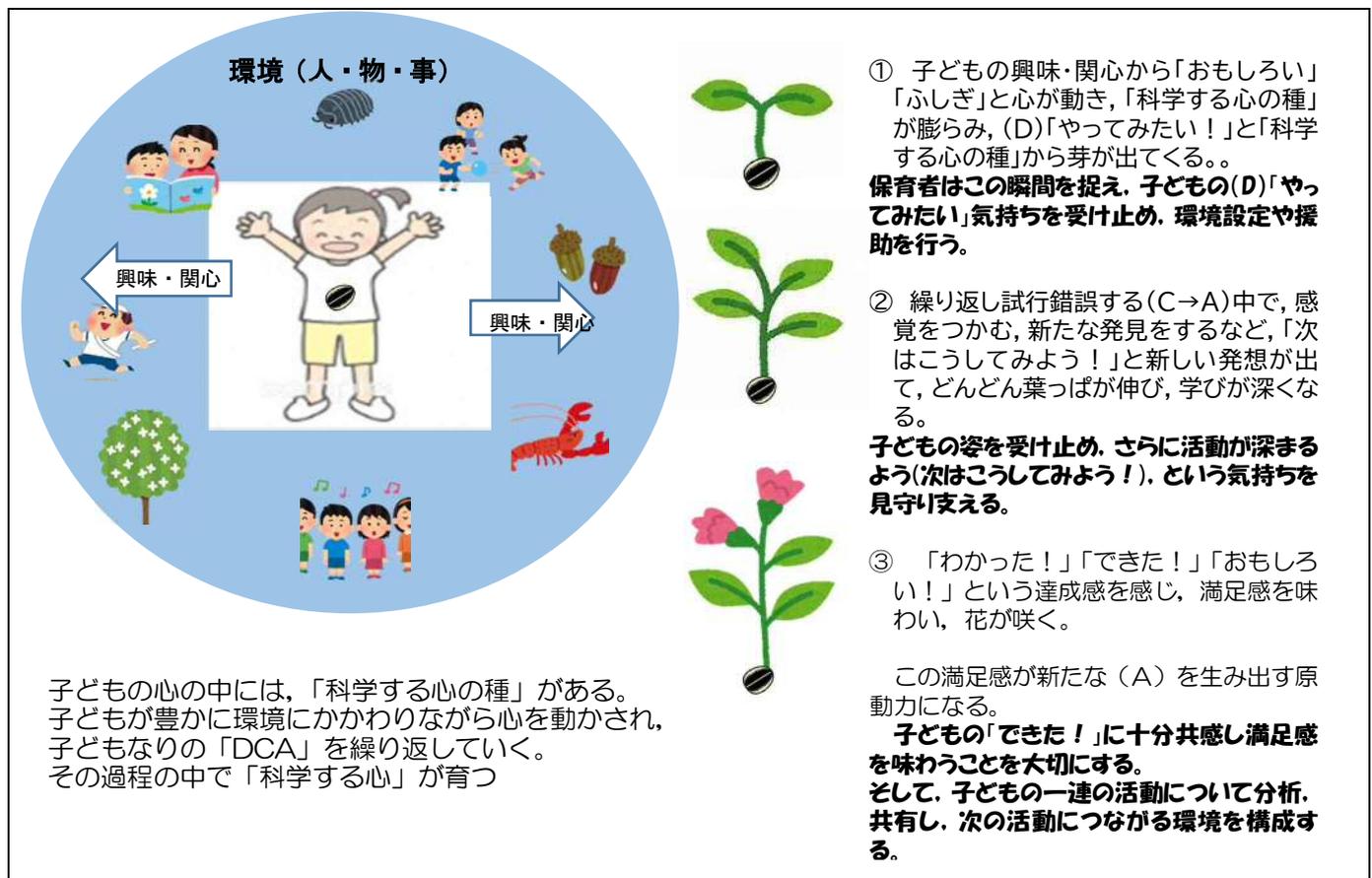
以上のような年齢ごとの実践結果から、「科学する心」の育ちの原動力となる「繰り返し」には、年齢により内容の変化が起きると考えた。つまり、3歳児は原則的に(D→C)を繰り返す。繰り返しの中で(A)につながる場合がある。4、5歳児は(D→C)の後、(C→A)に移行する。移行する経過として4歳児は、主として他者との関係から(A)に移行し、5歳児は自身の中で(A)に移行することができる。

このような、子どもの「科学する心」の育ちの原動力となる「繰り返し」の内容変化を保育者は認識する必要がある。例えば本例においては、3歳児に対しては「繰り返し」を見守りつつ、保育者は子どもの心情意欲等を踏まえ(A)につながる関わり・支援を行う。4歳児に対しては(A)を行う際に他者との関わりを支援することで(A)に対するヒントを与える。5歳児に対しては子ども自身が(A)につなげるための時間的猶予を活動に持たせる、ということが考えられる。

いずれにしても、子どもの「科学する心」の育ちの原動力は「繰り返し」にあることから、「繰り返し」を大切に見ることが必要である。

私たちは、今回の実践を通して「科学する心が育つ」過程を下記のように整理した。

科学する心が育つ「心の種」のイメージと保育者の役割



子ども達のまわりには「科学する心の種」を刺激するたくさんの環境が存在している。その種から芽が出ることもあれば(やってみたい (D),)出ないこともある。また, その芽が (D→C) 又は (C→A) を繰り返す, 大きな木になる場合もある。保育者は常に子どもの姿を見て, 「子ども自らが主体的に関わる環境の構成」が出来ているのかを自分の保育を繰り返し振り返ることが必要である。子どもをよく「見る」ことが, 子ども達が環境に関わりながら反復と試行錯誤(D C A)を繰り返し, 物事をよく知ろうとする姿を支えることにつながり, 「子どもの科学する心」を育むことになるからである。大切なことは保育者が「子どもを理解する」姿勢を持つということ。また, 保育者は, 子どもが興味・関心を持つ環境を思いつく想像力や探求心も忘れてはならない。

これからも, 1人1人の子どもがより豊かに環境(人・物・事)に関わり, 自分らしさを発揮しながら仲間と育ちあう保育の創造と, 子ども達の「科学する心」を大きく育てる保育の実践を積み重ねていきたい。

研究代表者名 橋本 恭子
執筆者名 妹尾 幹子・澤崎 洋子・中本 香代子